

広告特集

企画・制作
朝日新聞社メディアビジネス局

「クルマのある人生」

「大事なお迎え」

椎名誠

アメリカに留学し、卒業してもそのまま十年ほど仕事をしていた息子は現地で結婚し二人の子供をもうけた。上が五歳の男の子、下が二歳の女の子。小学校からは日本で、という息子夫婦の希望があつて日本に家族全員帰ってくるようになった。

迎えに行く役目の「じいじい」（かれらはぼくをそう呼ぶ）にとっては思いがけない重要な役目だ。

ぼくの愛用しているメルセデスは丸目のヘッドライトと、仲間うちに（ナスの味噌づけのような色）といっている濃紺のセダン。荷物も思いがけないくらい沢山入る。

遅れてはならじと着陸予定の二時間も前に空港に着いてしまった。五歳の孫とはいままで週に三〜四回は電話で話をしている。

サンフランシスコに住んでいるのだが、うまく舌がまわらずいつも「サンコンカン」になってしまう。ぼくが遊びに行くとき必ずベイブリッジに行き、その近くの広い公園で遊んだ。孫はこれも「ベイブリブリッジ」と独特の発音になってしまう。その橋の下でいつか釣りをしようね、というのが少年っぽくなつていく孫とぼくの約束だった。

でもぼくがサンフランシスコに行くとはかの用もあるからけつこう多忙で、少年とのその約束は果たせなかったのが残念だった。

空港待合室に「家はカーットのまわりにひとかたまりになって現れた。一番下の孫娘がはじめてやってきた日本の空気のなかで嬉しさをそれしかあらわせないようにぴんぴん

ん飛び跳ねている。駐車場のわがメルセデスを見て孫たちは大きくて可愛い、と言った。かわいい、の意味がよくわからなかった。

あとで彼らの父親（ぼくの息子）に聞いたらアメリカのクルマは無骨でやたら大きいのが多いからね、と解説してくれた。でもメルセデスだつてわが国のなかでは大きいクルマなのだ問題はそういうことではなかった。

家族を迎えに行くときはとにかく安全第一だ。その当時ぼくはアウトドア系のアメリカ製の四駆車もよく使っていたが、これは行く場所を選ぶクルマだった。

そうして東京のぼくの周辺には活発で面白い家族が定住するようになった。孫らはすぐに日本の生活や習慣に慣れていき、言葉もうまくなり、老妻と二人で暮らすじいじにとっては素晴らしい人生の午後がはじまった。

遺伝子が作用するのか、息子ファミリーは釣りによくいくようになった。

そうしてときおりぼくを誘う。空港に迎えにいったメルセデスはすでに彼らに譲つており、釣りにいくときは息子がずっと運転していき、ぼくは後部座席でゆったり居眠りという至福時間だ。

房総半島までのドライブがこころい。堤防では小アジ、小サバがけつこう釣れて、その夜のカラアゲ御馳走が約束された。

「サンコンカンよりも、ここのほうが釣れるんじゃないかな」とぼくは孫に言った。いつのまにか彼は少年の顔つきになっており、笑つて素直になつた。



椎名誠 (しいな・まこと)
1944(昭和19)年、東京生まれ。作家。『さらば国分寺書店のオババ』でデビューし、『アド・バード』(日本SF大賞)などのSF作品、『犬の系譜』(吉川英治文学新人賞)などの自伝的小説や、『風のかたのひみつ島』のような旅と食のエッセイなど幅広い分野にて著書多数。

支えつづけて、1世紀。



日本を走る輸入車に必要なものは何か。1915年の創業以来、私たちは考え続けてきました。定期点検や整備はもちろん、旅先でのトラブルにも万全の対応でお応えする全国ネットワーク。クルマの年式に関わらず、熟練のメカニックによる上質なサービスを提供すること。すべては、何の不安も不自由もなく、輸入車の魅力を存分に味わっていただくために。YANASE。そのステッカーは、1台1台を支えつづける私たちの決意の証です。

クルマはつくらない。クルマのある人生をつくっている。 **YANASE**
株式会社ヤナセ www.yanase.co.jp